

カッパドキア、ウフララ溪谷の聖堂調査に関する覚書

——新発見の小聖堂群を中心に——

武田 一文

2014年8月に行ったトルコ、カッパドキア調査において発見された岩窟聖堂について、記述を中心に簡潔に報告する。様式的、図像学的分析については、追って別稿で詳細に論じることとする。ビザンティン時代のカッパドキアでは比較的軟らかい凝灰岩の岩壁を掘削して盛んに聖堂が建立された。夏は40度を超え、冬は降雪する砂漠地帯であるカッパドキアでは、温度が比較的安定的である岩窟空間は庶民の生活に欠かせないものであった。無数の小聖堂が遺されていると言われながら、それらの調査が必ずしも進んでいないのは、砂漠という調査を困難にする環境もさることながら、岩壁に無数に穿たれた穴が、果たして聖堂なのか、はたまた倉庫、鳩小屋、蜜蜂小屋等であるのかを容易に判断することができないことにも起因していよう。今回筆者の調査では、壁画を遺す聖堂を含めた四聖堂を、恐らく新たに見出すことができた。簡単ながらその顛末と聖堂の基本状況を提供し、カッパドキア聖堂研究に資することができれば幸いである。

調査の状況と発見まで

カッパドキアは初期からビザンティン帝国領であり、カッパドキア三教父を輩出したことで著名である。火山活動によって堆積した凝灰岩を主体とする地質は、永年の浸食を経て壮大な奇景を生み出し、現在では世界各地から観光客が訪れる、トルコ有数の観光地でもある。一方その地質は、柔らかく掘削が容易であり、砂漠の気候から逃れるために多くの岩窟が穿たれた。現在でも多くの岩窟が地元の人間によって倉庫などとして使用されている。聖堂もまた、ビザンティンの他地域のような煉瓦造ではなく、岩窟内に聖所や壁龕などを形作ったものである。削った壁面の上に漆喰を塗り、一面の壁面をもって荘厳するのはビザンティン聖堂の常を踏襲している。1071年のマンツィケルトの戦い（現地ではマラズギルト（Malazgirt）の戦いと呼ぶ）をもってビザンティン帝国下から離れたカッパドキアでは、千年に亘る風化とトルコ人や観光客による汚損に曝されながらも、未だ数百あるいは千を超える聖堂を遺すと言われる¹。またその少なくない

¹ ロドリーはその数を600以上とし、併せてトルコの研究者が完全に網羅した数ではないものの、703の聖堂を数えているとする。一般のガイドブックでは千を超える、とするものもある。本文中で指摘した小聖堂の新たな発見の困難さ、さらに一部の聖堂は私有地内に建つことなどを考慮すると、正確な数字を求めることは容易ではないだろう。L. Rodley, *Cave Monasteries of Byzantine Cappadocia*, New York, 1985, p.7.

数に壁画が残存し、他地域ではほとんど残ることのないイコノクラスム以前の作例を含め、中期ビザンティンの作例多数を現在に伝える、ビザンティン美術研究にとって重要な地域である。

筆者は2014年夏、8月15日から28日までトルコ、カッパドキアに滞在し、調査を行った。筆者の研究対象はビザンティン聖堂装飾であり、当地に遺る聖堂壁画の写真撮影を主たる目的としていた。8月25日、カッパドキアの観光における中心であるギョレメから50kmほど離れたウフララ (Ihlara) 渓谷を訪れた。台地に挟まれ、兩岸のほぼ垂直の崖から崩れた岩が斜面を形成し、その底に川が流れているのがウフララ渓谷である。乾燥したカッパドキアでは珍しく、真夏でも冷たい水が滔々と流れ、灌木だけでなく高木も生い茂り、オアシスといった風情である。観光地化が進むカッパドキアの中でも、トレッキング・コースなどとして多くの観光客を集めているようである。現存する聖堂も複数あり、谷底に近くアクセスの容易な幾つかは案内板も整備され、観光の対象となっている。

この日はウフララ調査第2日であった。整備された歩道から少し外れた聖堂を探すことを試みた。カッパドキアは、聖堂の数が多くことで著名であるが、その殆どは観光地化されず、位置すら必ずしも詳らかでない。ギョレメ (Göreme) を中心とした地域を踏査してカッパドキア研究の礎を成したジェルファニオン神父を始め²、多くの研究者が同地を調査しているが、それら先行研究が示す位置情報は大まかな地図上の「点」であったり、文章による「行き方」であったりと、荒涼とした大地の前に聖堂を探し求めるにはあまりに心もとない³。そのような中で、ジョヴァンニが著した *Arts de Cappadoce*⁴ はそれまでの研究で知られた聖堂を網羅的に収集し、等高線つきの地図上に纏めており、完全とは言えないながらも各聖堂の位置把握には非常に有用なものである。そこで今回の調査ではジョヴァンニを基本文献としながら、現地ガイドであるバルシュ・シャヒン氏の助力と共に聖堂を探索することとした。今後の調査の用に資するため、聖堂のGPS座標を得ることを併せて行った。ただし専用の機材を用意することは叶わなかったため、スマートフォンのGPS機能を利用した。機材はAndroid端末の「Sony Xperia z1f SO-02F」、座標取得にはAndroidアプリの「GPS Test」を使用した。GPS Testは天頂のGPS衛星の個数、位置情報の精度などをリアルタイムに表示するため、本調査の目的には非常に便利なものであった。なお今回の調査では谷底など信号状況の悪い場所を移動することや、バッテリーの懸念から、GPSログを収集するには至らなかったことを附記する。

本稿で対象とする聖堂を発見したのは全くの偶然からであった。筆者とバルシュ氏が当日目的地としていたのはバル・キリセ (Balı Kilise) であった。渓谷の北西端であるベリスルマ (Belisırma) から谷に入り、川の右岸に設けられたトレッキング・コースに沿って進む。途中で川を左岸に渡り、

² G. Jerphanion, *Une nouvelle province de l'art byzantin : les églises rupestres de Cappadoce*, Paris, 1925-42.

³ 現在カッパドキア研究の第一人者はフランスのジョリヴェー・レヴィであろう。しかし彼女の著書では地図はほとんど掲載されない。C. Jolivet-Levy, *Etudes Cappadociennes*, London, 2002 他。

⁴ L. Giovannini, *Arts de Cappadoce*, Genève, 1971.

獣道を進んで斜面の中腹にあるのがバル・キリセであるとのことだった。しかし結論から述べれば、この日バル・キリセを見つけることは出来なかったのである。一つにはウフララは観光地化が進んだとは言え、依然殆どの聖堂には道標や案内板の類が設けられていないこと、あるいはあったとしても非常に示すところが分かりづらいことがある。溪谷の谷底は背丈以上の灌木、高木が生い茂り、見通しがきかない。獣道を外れようにも、地中海の乾燥地特有の非常に鋭い棘を持った植物が路を塞ぐという困難が付き纏うのである。

そこで我々は、谷底沿いのルートを諦め、一旦斜面を登り、上から見下ろすように探すこととした。斜面の岩石は風化が進んでおらず、数十センチから1メートルを超えるようなものもあり、これらを乗り越え登ることとなった。斜面の上端はほぼ垂直の崖になっており、そこまで登ったのち、中腹を見下ろしながら、崖の壁面に沿って西進する形、すなわちベリスルマの方角へと戻り始めることにした。この時点で、我々はバル・キリセを通り過ぎたものと考えており、位置は中腹ではなく斜面と崖の接点部分なのではと考え始めていたからである。しかし凹凸の多い斜面のため、俯瞰する視点が得られず、結果的に崖側を注視して歩くこととなった。

そのさなか、壁面に穿たれた洞穴を幾つか確認したが、そのうち四つが聖堂あるいは墓所と思われるものであった。一つには損傷が激しいながらフレスコ壁画も残存していた。我々はそれぞれの位置情報を記録し、簡単な写真撮影を実施した。しかし遺憾ながら、この時点では本聖堂が新発見である可能性に思い至らず、また我々が携行していた飲料水が不足していたため、十分な測量を行うことができなかった。従って本稿はあくまで発見の第一報に過ぎず、考察は再調査を踏まえて追って行いたい。

聖堂の状態

本稿では仮に東から1番～4番聖堂と呼ぶこととする。それぞれの座標は以下のとおりである。

1 番聖堂 E34°17'56.784", N38°15'27.892"

2 番聖堂 E34°17'52.678", N38°15'28.386"

3 番聖堂 E34°17'51.126", N38°15'27.795"

4 番聖堂 E34°17'47.857", N38°15'25.955"

これらの数値を Google Map に入力した結果を図版として提示する (図1)。地図中央の白点は相対位置の参考として挙げたカラゲディク・キリセ (Karagedik Kilise)⁵ である。画面中央よりやや下に四つ並んだ白点が右から1番～4番聖堂である。ジョヴァンニの当該地域の地図を併せて参照されたい (図2)。ジョヴァンニの地図10番が当初目的としていたバル・キリセであり、

⁵ Giovanni, *op.cit.*, p. 205.

12番がカラゲディク・キリセである。Google Map 左上の点がカラゲディク・キリセであるから、1番聖堂から4番聖堂はバル・キリセより斜面を登った位置で、ジョヴァンニは聖堂の存在を指摘していない位置に当たる。なおGPS座標は概ね誤差20フィート以内に数値が定まった時点で取得しており、地図上の位置関係は筆者の調査時の感覚とも一致することを付け加えておく。以上の点から、1番聖堂から4番聖堂はこれまで報告されていない新発見の聖堂である可能性が高い。聖堂内の状態を見ても、他のカッパドキア聖堂に比べて人が侵入した形跡が非常に少ない印象を受けた。本聖堂群は谷底や斜面途中からではその位置が見えづらく、人の注意を引きにくかったためであろう。斜面は大型の岩石が多く登りづらいため、敢えて聖堂を訪れる人間が少なかったと考えられる。同様に斜面を登った先の岸壁面に位置する聖堂としては、ソーアナル (Soğanlı) のバルルク・キリセ (Balluk Kilise) などが挙げられるが、バルルク・キリセの場合斜面下からでも洞穴が開いているのが容易に観察でき、また斜面の地質も斜度はあるものの礫は大きくなく、登坂は比較的容易である。そのような聖堂には一定量の落書きやごみの放置がなされており、人の出入りが確認できる。

以下、四聖堂の状況を記述する。なお1番および4番は内部に壁画など特筆すべき点が認められなかったため、本稿では外観のみを提示する。

1 番聖堂

外壁にアーチ状の入り口を穿ち、その周囲を更に彫刻し二重アーチのように装飾している。アーチの頂部には、これもアーチ状の枠内に、十字架の浮彫を形作っている (図3)。内部には何も残らないものの、以上の入り口の装飾からこれが聖堂であったことが判る。

2 番聖堂

四聖堂のうち唯一壁画が遺る聖堂である。入り口部分は地面よりやや低い位置になっており、かなり接近しないと聖堂の存在には気付かない (図4、図5)。入口部分は半壊した状態であり、現状の開口部は人が屈んでようやく入れる程度の高さしかない。内部はまずナルテクス状の空間がある (図6)。ここでも立ち上がることは出来ない程度の高さである。正面、及び向かって右の壁面にはフレスコが残存している。正面左には開口部があるが奥行きはなく、残存物はない。

正面の壁画は剥落が著しく、描かれた内容は不明である。右の壁画は、左右二画面に分割されている (図7)。左側の画面は、長槍を持ち騎乗した聖人が描かれる。その右には画面の傷みから分かりづらいものの、龍と思しきものが描かれていることから、ゲオルギオスであると思われる。なお銘文が記されるが、内容は追って別稿にて検討したい。右の区画には真珠で飾られた女性聖人の正面観の立像が描かれ、その右下方には十字架がモノクロームで描かれる。このナルテクス状の空間には柱状の残片が転がっており、かつては現状より複雑な建築空間であったことを

思わせるが、詳細は不明である。立ち上がれないほどの高さは当初からであるとは考えづらく、何らかの理由で土砂が流れ込んだものと思われる。発掘調査を実施すれば、砂の下に埋もれた壁面に壁画が残っている可能性も否定できない。

右壁面の開口部から奥に進むと、奥行き4～5メートルほどの空間が広がっている（図8）。こちらの空間は人が立っても十分な高さがある。ただし開口部がナルテクスに繋がる小さな入口のみのため、ほぼ完全な暗闇である。奥には四分の一球形天井を持つ壁面があり、おそらくアプシスであつたらう。壁画はアプシス右側面と、ナルテクスに繋がる壁面にそれぞれ断片的に遺る。アプシス側面の壁画は男性聖人の立像である。この聖人は胸の辺りに二重の真珠で飾られたメダイオン状のものを抱えているように見える。メダイオンの中央部分が目立って削られているため、人物像であつたこと可能性が高い。開口部左に遺る壁画（図9）は損傷が激しいが、白馬が確認できるため、ナルテクスと同じくゲオルギオスであろうと思われる。カッパドキアでは、一つの聖堂に複数のゲオルギオスが描かれることも稀ではない。開口部右には、三人の女性と思しき聖人の立像と、聖人像より大きなプロポーションで大天使ミカエルが描かれる。大天使像は本聖堂の残存壁画中唯一の顔面が損傷なく残っている例である（図10）。

3 番聖堂

現在の入口部分は崩落で大きく損なわれている。残っている壁面には壁龕があることから、往時はここも内部空間であつた可能性があり、かなりの規模を持った聖堂であつたことが伺える。人が通れるほどの高さの開口部から入ると、縦長の部屋があり、その右壁面にさらに奥に続く開口部がある。奥の空間は2番聖堂と同じく聖所らしき空間がある部屋で、おそらく本堂^{ナオス}であつたらう（図11）。構造物の崩落が著しく、先の部屋も含め壁画は残存していない。本堂の床面には多くの棺が掘り込まれているのが特徴である。聖堂建築が墓所となるのは珍しいことではないが、カッパドキアの聖堂では壁も床も同じく凝灰岩から掘り出していることから、棺を設置するのではなく、床を棺状に掘り窪め、そこに遺体を安置することがよく行われたようである。本堂では、そのような棺が他よりも多い印象を受けた。そのうち一つには、大腿骨の骨盤との接合部分である大腿骨頭が遺されていた。これが人骨であるのか、野生動物のものであるかは判然としないが、骨は風化の程度が著しく、また墓は幼児用と思しきサイズであつたが、それと合致する大きさであるように思われた。なお本堂以外のカッパドキア各地に遺る聖堂で、筆者の調査中骨らしき遺物は一切確認できていない。いずれも風化で失われたのか、博物館などに収蔵されたのか、盗掘の結果なのかは不明である⁶。また一部の棺の頭部側に接する壁面には、十字架を意匠化した浮彫が施されている。

⁶ なおギョレメの野外博物館など一部の管理された聖堂では、墓の中の人骨がほぼ完全な形で保存され、展示されている。

4 番聖堂

崖の突端部分にあり（図 12）、内部にも遺されたものはないが、構造から聖堂であったと想像できるものであった。

おわりに

以上、カッパドキア、ウフララ溪谷で発見された聖堂について、若干の写真と共に基本情報を提示した。今後は特に 2 番聖堂について、壁画の銘文の分析、図像学的側面からの年代推定を行う予定である。本稿で見たものはカッパドキアに多数遺る小聖堂群の中でも、極めて小さな聖堂に過ぎない。しかし本報告の意義は以下の二点にあると思われる。一つはカッパドキアではすでに多くの聖堂が報告され、研究されているが、まだ未発見のモニュメントが多数あると予想される点である。観光客が大挙するギョレメ野外博物館などの陰に、これら無数の知られざる聖堂が眠っているのである。もう一つは、これらの聖堂の記録を残すという緊急の作業が求められている点である。四聖堂でも入口部分は崩落し、2 番は今後も土砂の流入が続けば進入すら難しくなる事態も考えられる。地図での参考例として挙げたカラゲディク・キリセであるが、これはカッパドキアでは珍しい岩窟聖堂ではない切石造の聖堂だったが、2011 年に⁷ 崖から崩落した数メートル四方の巨岩の直撃を受け破壊された。他の地域でも入り口部分から崩落が進む聖堂、壁面や天井に亀裂の入った聖堂など、危機に瀕している聖堂は数多い。元々掘削が容易であったという岩窟聖堂の特性は、風化が進みやすいという問題と表裏一体である。勿論抜本的な保護、修復が求められるのは言うまでもないが、無数にある聖堂すべてにそれが実現されることは難しい。であるならば、まずは現状を記録し、失われゆく情報を出来るだけ留めることは、無益な行為ではあるまい。

図版出典

図 1 Google Map の画像を基に筆者作成

図 2 Giovannini, *op.cit.*, p. 205.

図 3-11 筆者撮影

【附記】本研究は、公益財団法人鹿島美術財団による 2014 年度「美術に関する調査研究」助成の成果の一部である。

⁷ 現地案内板による情報。

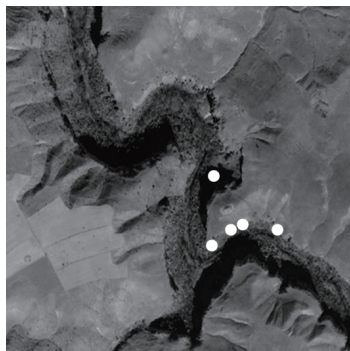


図1 ウフアラ地図

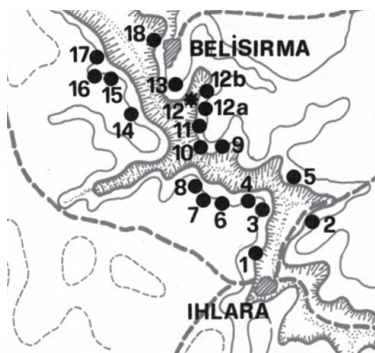


図2 ウフアラ地図 (ジョヴァンニより)



図3 1番聖堂外観



図4 2番聖堂外観 (中央下、やや右が入口)



図5 2番聖堂入口

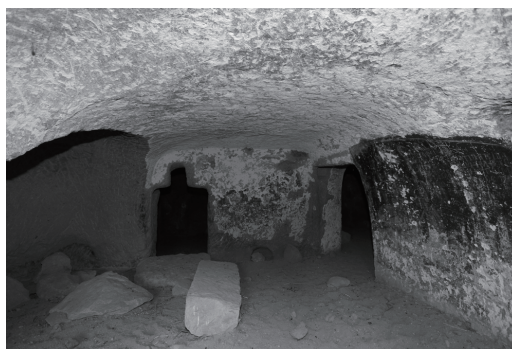


図6 2番聖堂ナルテクス



図7 2番聖堂ナルテクス フレスコ壁画



図8 2番聖堂本堂



図9 2番聖堂本堂入口 フレスコ壁画



図10 大天使ミカエル



図11 3番聖堂本堂



図12 4番聖堂外観